

第6回 医者が考える「あの世」

先日僕は、地元の老人会で講演をする機会に恵まれた。医師が高齢者に話をする場合の内容は「どうしたら健康長寿が出来るか?」と相場は決まっている。けれど僕は、「人生の先輩達に伝えたいこと」という演題で、何と、「あの世」の話をしたのだ。ある意味で、「高齢者に死を語る」という「タブー」を犯したわけだ。

そもそも僕は、個人的な霊体験や医師としての経験から、「あの世」はあると強く確信している人間だ。もしも「ある」と信じていた「あの世」がなかったとしても、全て無に帰するだけで、誰も損しないのだから、それはそれで良い。けれど、「ない」と信じこんでいた人にとっては、いざ死んでから「あの世」があったら、かなりの脅威である。どうしてよいか分からず、自分が亡くなった家や病院にずっと地縛してしまうかも知れない。だから、「ある」

と考えていた方が良いに決まっている。

いくらどんなに医学が進歩しても、人間にとって『死』は避けることの出来ない真理である。生に執着して死を必要以上に恐れ、ピクピクしながら晩年を過ごすよりは、「あの世」の存在を信じて、死後、唯一「あの世」に持って帰れる「心」の錆び落としをしながら、家や財産、地位や名誉、家族など「この世」への執着を捨て去り、自由な世界への旅立ちを心待ちにして明るく過ごすことを、僕は医師として推奨したい。

何故なら、唯一これだけが、人生の晩年においても「未来への希望」を持つことが出来る考え方だから。

医学博士 木村謙介

北海道大学医学部卒。慶應義塾大学医学部循環器内科専任講師などを歴任。
 米カリフォルニア大学サンディエゴ校医学部留学、最先端の基礎医学と豊富な臨床経験を持つ。「大きな病気を発症する前にその芽を摘み取る方が医療レベルは高いはず」の信念で2012年、きむら内科クリニックを開設。

